

第18回世界農業遺産勉強会

奈良教育大学 教育連携講座 中澤静男

- ◇開催日時 平成29年9月13日(水) 18時30分～21時
◇会場 中澤研究室
◇内容 「土地に恵まれない日本の農業は本当に弱いのか？」担当：山方先生

(1) 伸びてきた農業と縮小傾向が続く農業

10a 当たりの所得 (2006年)

伸びてきた農業：野菜作 露地野菜 (10.5万円)、施設野菜(19.2万円)

果樹作 (12.1万円)

畜産 酪農(都府県：10.3万円)、北海道 (1.3万円)、養豚 (47.2万円)

縮小傾向が続く農業 水田作 都府県 (2.1万円)、北海道 (3.5万円)

麦や豆も →カロリー型の作物という共通点、土地利用型農業

- 土地当たりの付加価値の大きい農業は、限られた面積の土地を舞台に、経費と労働を集中的に投入する農業：
集約型農業、土地節約型農業

→山方氏の疑問 飼料を輸入し、牛や豚に与え、太らせて出荷するという加工型畜産業は、もはや農業と言えるのか。

生き物を扱っているので農業機械というブラックボックスの代わりに牛や豚があるだけなので農業とは言い難い



野菜作・果樹作・畜産の伸びには、日本人の食生活の大きな変化が影響している。
肉食や乳製品摂取量の増加、健康志向を反映した野菜・果物の摂取、グルメ志向
特に国産品を選ぶ傾向が多いのも影響している

→ 油脂類の摂取量も増えているのに、大豆(油脂植物の第1位)の生産量が増えないのはなぜ？

- 集約型農業のウイークポイント

飼料や燃料の価格の上昇。石油燃料と飼料穀物に強く依存する施設型の農業は、持続性に注意が点っている

飼料価格の変動 → 畜産業への影響

燃料価格の変動 → 施設園芸への影響

- 持続可能な農業への方策

エコフィード：食品廃棄物を資料にする

ソーラーシェアリング：水田の上にソーラーパネルを設置して売電と米作を同時にする。

(2) 食生活のあり方を見直す

旬産旬消と農業生産 農業生産を多様な側面からみる (大西)

- ・季節外れの施設型作物 高価格で売れるが、エネルギー使用量・CO2排出量は大きい
- ・特徴ある気候を生かした季節外れの作物 全国に出荷する段階でエネルギー使用量が大きい
- ・これらを農家の工夫として教えてきたが、環境面からも考える授業が必要だろう
- ・キーワード 「旬産旬消」「地産地消」「土」



(3) 土地利用型農業について

- ・水田農業の規模 1ヘクタール未満が73%
- ・水田農業の高齢化 この73%の農家の経営主の平均年齢が60歳代後半に達している。世代交代が進んでいない
- ・この規模の農家のほとんどは兼業農家
- ・10ヘクタール以上の農家の平均年齢は50歳代。しかしその割合は0.5%。

- ・兼業農家の増加が水田農業の規模拡大を抑制

農業以外の収入があったので無理に規模拡大する必要がなかった

兼業農家として農地の耕作を続けたため、規模拡大しようとしても土地が手に入らない

- ・兼業農家の第三世代には、スキルが伝承されていない。土地があっても耕作できない。これは農地を拡大できるチャンスになるかもしれない。

(4) 農業経営の厚みを増す

①図2「稲作の規模と平均費用(2005年)より

10ヘクタール程度の規模が、ベストの生産性を実現している。

②生産物の価値を高める工夫：環境保全型農業によって、販売価格を引き上げる

→ 佐渡・長良川の取り組み：ブランド化（山方氏）

③土地利用型農業に集約型農業を組み合わせる

地域の伝統野菜の復活 → 奈良の伝統野菜(山方氏)

④農産物の加工や流通にも取り組む 六次産業

しかし、本当に農家はそんなことがしたいと思っているのか。それよりも農業に集中したいと思っているのではないか（阿蘇の宮本氏）

インターネットを利用した個別販売

(5) 農村コミュニティの変容

- ・定年帰農組・地域在住の元農家・農村から生まれた法人経営・集落営農（農家が共同で作業を行ったり、計画的に作付け作物を決めるやり方←旧ソ連のコルホーズ・ソホーズを思い出す）。

